



向こう三軒両隣

「向こう三軒両隣の分の掃除をするのが昔の丁稚の朝の仕事でした。道の反対側の3軒分と自分の店とその両隣で6軒分の掃除をするわけです。もし、朝寝坊して、隣の店の丁稚に自分の前の掃除をされたら、番頭に大目玉をくらって殴られました。」

自分の家の向かい側3軒分と、左右2軒の隣家。日常親しく交際する近隣の人のことで、古くは隣保制度の単位でもあった。隣保とは、となり近所。近所の人々や家々。隣組の単位ともなった。

近所づきあいは、面倒だったり、しがらみが鬱陶しかったりしますが、何かあったときに助けられる関係でいられるように大事にすべきです。要するにそれが気遣いであり、最小の責任の範囲でもあるわけです。

良好な地域社会生活を送るには、もう一度「向こう三軒両隣」の精神に戻らなければなりません。良好なコミュニティー形成づくり、ご近所付き合いの要となります。

今は、合理主義・個人主義の花盛り。日本の習慣・風習は野暮で時代遅れと言わんばかりに捨て去ってきました。個人主義的な考え方で良いはずはないわけで、昨今のいろんな事件をみてもこの考え方に起因しているのではないかと思ってしまうほどです。まずは、自分ありき先で他人はどうでもよいという傾向の強い個人主義から方向転換をしなければならないのでしょうか。



「向こう三軒両隣に学ぶ」より

私は、非常に恵まれています。近隣の方々に声を掛けていただいたり面倒を見ていただいたりの毎日です。

近くに、山木屋地区より移り住まわれている、JH(44歳)さんがおります。川俣の工場に勤めながら休みの日には、野菜づくり畑仕事に精を出しています。私の部落は隣接する(自分の土地・農地)道路(県道・市道)の法面の草刈りと、河川(女神川)の法面の草刈りを自発的に行っています。彼は、河川の堤防の道(約400m程)の草刈りをしてくれています。畑に行くのに通させてもらうからと。

春先に亡くなられた長老も、忙しいようだからと私の田んぼの土手の草刈りをいつもしてくれました。

私は、こんな方々に支えられて、こめづくりをしています。早く、「向こう三軒両隣」の考え方にそって地域貢献が出来るよう励んでいきたいと思っています。

菅平米園 園主 須田 正一